

「ヨハネによる福音書」を読む (第6回)

ヨハネ福音書 第11～12章

2009年10月4日 (東京 新宿)

奥田 昌道

ラザロとマルタ、マリアの愛の物語 永遠の生命 「ラザロよ、出てこい！」 ナルドの香油

一粒の麦、地に落ちて死なずば 信愛と信義 天命を知る 祈り

●ラザロとマルタ、マリアの愛の物語

今日のヨハネ福音書の11章、12章は実に素晴らしいところだと、改めてこれをずっと読みまして感じました。恥ずかしながら私はかつてここを読んでいたときに、11章はラザロを甦らせたところだ、12章はもう主の十字架の前のわずかなところで、「一粒の麦、地に落ちて死なずば」ということを語られたところだと、バラバラに読んでいた。ところが、このたびここを読んだら、なんと主人公は誰かというところ、ラザロ、マルタ、マリアなんです。それに気づきました。この11章と12章はラザロ、マルタ、マリアを軸にして回転しているドラマだということに気がついた。他の福音書のマタイ、マルコ、ルカには全然こういうのは出てきません。だいたいこのラザロという人はヨハネ伝にだけ出てくる。マルタとマリアについては、

「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことを思い煩っている。しかし、マリ

アはよき方を選んだ」

とかいうことで出てきたりするけれども、この三人兄弟姉妹のことはこのヨハネ伝にだけに出てくる。しかも、ここは正にイエスというお方の、このラザロ、マルタ、マリアという三人兄弟姉妹に対する深い愛の物語なんです。そのことを私はこれを読むたびに強く感じました。それがとても嬉しかった。イエスという方は決して道を説く道徳教師ではない。本当に涙のあるお方だということがよくわかります。イエスはマルタに対して、

「あなたの兄弟は甦るんだ」

「はい、終わりの時の甦りのことはよく存じております」

「いや違う。今、甦るんだ」

と言われた。しかも、このベタニヤにおいてになる前に、イエスはヨルダン川の向こうにおられた。どういう伝で居場所をつきとめたのかは分りませんよ、マルタ、マリアのほうから使いをつかわして、

「あなたの愛し給うラザロが病んでいます。どうぞ、来てください」

と。それを聞いたイエスは、なおそこに二日留まってから、



「ラザロは眠っている」

「眠っているならば、また目覚めるでしょう」

「いや、死んだんだ。ラザロは死んだ。しかし、私はそこに居なかったことをあなたの方のために喜ぶ。神の栄光を見るからだ」

と、はつきりそこで弟子たちに言っておられる。「ラザロが病んでいます」ということを聞いて、その日に既に死んでいるとしますと、その日が一日目、それから二日留まって、そしてこのベタニヤへおいでになったのが四日目ですね。それで

「もう四日も経っていますから臭くなっています」

ということでしょう。そのようにして、

「必ずラザロを甦らせる、それは父の御意だ。みこころ 私がそこに居合わせないことは、あなた方にとってよかった」

とまで言ったイエスは、いざ現場へ来てみると、まずマルタが泣いている。

「あなたがここに居てくださったならば、ラザロは死なないで済んだんですよ。」

遅いではありませんか」

と、なかばうらめしく言って、

「しかし、あなたの仰ることなら、どんなことでも聞いてくださる。そのことを信じています」

と言うものだから、

「ラザロは甦るんだ」

「はい、終わりの日の甦りはよく存じています」

「いや違う。今、目の前で甦るんだ」

と、そこまで断言された。そのイエスが今度はマルタに、

「マリアを呼んでらっしゃい」

と仰る。そしてマルタはマリアの所に言って、「先生が呼んでおられるよ」と。マリアは家の中でじっとしていた。ところが、そのイエスの言伝を聞いて、すぐ立ち上がって出かけて行った。周りの者は、きっと墓へ泣きに行くのだろうと思って、ゾロゾロと何人か付いて行った。イエスはマルタとお会いになったその場所でお立ち止まっておられた。そこへマリアは来ました。そして、マリアは同じことを言うんですね、

「あなたが居てくださったなら、ラザロは死なないで済んだんです。遅いではあり

りませんか」

という思いで。しかし、その時も、マルタのほうは——まあぶしつけにというか——「先生、先生、遅いではありませんか！」という感じですが、マリアは「平伏して」と書いてある。平伏してイエスに声をかけられた。そこにマルタとマリアの少し心の姿勢の違いが表われているかもしれません。どちらもイエスのことが大好きなんです。大好きなんだし、イ

イエスも二人を愛しておられるし、ラザロも愛しておられる。ところが、マリアは平伏して、「イエスさま、あなたが居てくださったのなら、ラザロは死なないで済みましたのに」

ということを言った。そしたら、「いや、甦る」ということをまた仰る。そのマリアがお墓の所へ連れて行く。マリアが泣き、また一緒に来た者も涙を流しているのを見て、イエスは烈しく心を揺さぶられて、「涙を流された」と書いてある。理屈からいうと、目の前で甦らせてみせるから、悲しんで泣くことはないじゃないかと。これが理屈です。ところが、イエスはそうじゃない。あのマリアがあんなに悲しんで泣いている。同じ気持ちになってイエスも涙を流しておられる。これが私は大好きなんです。頭の理解と、現実の目の前の人が悲しんで泣いている姿は違う。そこにイエスは飛び込んでしまつて、同じ姿になって涙を流しておられる。そして、墓の前に行つて、

「石を取り除けなさい」

と。そして、お祈りをなさつてから大声で、

「ラザロよ、出てきなさい！」

すると、ラザロは出てきた。それで今度は大騒動になる。イエスを讃^{たた}える人たちと、パリサイ人に告げ口しに行く人がいる。パリサイ人、祭司長、宗教権力者たちは、

「このまま放っておけば大変なことになる。人々はこぞつてイエスの弟子になつてしまう。イエスに従つていく。そうすると、ローマの官憲がやつてきて、

我々の国を滅ぼすかもしれない」

なんてことまで出てくる。そして、イエスをはつきり殺そうと決めるわけです。

それでイエスは退かれるけれども、数日たつてまたベタニヤに来られる。そこでラザロの家で振る舞いが設けられたというふうが続いていくわけです。そして、マリアはナルドの香油を注ぎかけて、涙で洗い髪の毛で足をぬぐつて、香油の香りが漂つたという、そういうお話が出てきます。そのようにみますと、正に11章と12章の主人公は、ラザロをはさんだマルタとマリアなんです。

私は、これは推測なんですけれども、その三人の中でやはり一番マリアを愛しておられたのではないかと思つてしまう。これは私の邪推かもしれませんが、聖書には、

「イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」

と書いてあるから、ラザロを愛しておられるし、マルタを愛しておられるし、マリアを愛しておられる。平等なんですけれども、何となく、マリアに対する思いが深いような気がする。そういう、人としてのイエスが——神の子でありながら——人としての情も愛もそなえたイエスが、このマルタ、マリア、ラザロという三人兄弟姉妹を特別に愛しておられるということ。その愛がイエスをして涙を流させ、ラザロを甦らせるという御業^{みわざ}へと展開していった、



「愛は死に打ち勝つ」

というお話ではないかと思う。

ラザロを甦らせたというのは、このヨハネ伝にしか出てきません。他の福音書では出てきません。ルカ伝では、一人息子を失った寡婦やもめのお葬式の行列がスタートする時に、柩ひつぎに手をかけて「若者よ、起きなさい」と言われたら、死んでいた若者は甦ったというお話が出てきます。そのあとで、獄中のヨハネの話が出てきて、ヨハネが弟子を遣わして

「預言者を私たちは待ってますが、本当にあなたがそれなのですか？ あなたのなさっていることはちつとも祖国解放のような御業はなさいません。貧しい人と一緒にいたり、病める人を癒してみたりしていらつしやる」

と。ヨハネからみたら、つまらんことなんです。祖国復興という、ローマからの解放、それをなし遂げてくれる「メシア」——もちろん神の審判をとおしてです——それを期待しているのに、イエスのなさっていることは全然そうではないではないか、ということで、「誰か他を待つべきでしょうか？」と聞くと、イエスは

「ヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、病める人は癒され、死人は甦らされ、貧しい人は福音を聞かされている。およそ私に躓かない者は幸いである」

と答えて、使いの人にヨハネへの伝言を託されます。

ルカ伝ではそのように、寡婦の一人息子が甦らされたという話は出てきます。マルコ伝やマタイ伝では、ヤイロの一人娘が病んでいて——12歳の少女です——両親がとても悲しんでいる。その家に行つて、

「タリタ、クミニ！」（少女よ、起きよ！）

と言って、甦らされました。そんな話は出てきますけれども、ラザロを甦らされたという話はヨハネ伝だけです。

それぞれの福音書を記した人たちは、それぞれ自分の心に残るもの、印象深いものをストーリーに書き上げたのだと思います。ヨハネ福音書の全体を貫く主題は「永遠の生命」です。しかも、永遠の生命とは、この世限りのものではない。この世を超えて、それこそ正に永遠界、絶対界に繋がっていくような生命、神さまがお持ちの生命です。我々相對界の人間は、死というもので閉ざされています。どんな人も必ず死にます。そこに別れがきます。別れは涙が伴います。いくら、

「また来世で会えるんだから、あとしばらくだよ」

と言われても、やはり愛する者を失うという、痛み悲しみは絶大なものがあります。それをイエスはよくよく御存知であった。それでいながら、なおそれを乗り越える。その永遠の生命というものを実証してくださっている。これがヨハネ福音書なんです。ヨハネ福音書の全体を貫いている主題は「永遠の生命」です。繰り返し繰り返し出てきます。



「私を信する者は永遠の生命を持つ」

と出てきます。ですから、ヨハネ福音書をお読みになるときに、各章を断片的に読むのではなくて、もう一度始めからずうつと通して読んでいきます。たとえば今日の復活のところで、実は先に5章の所でイエスが語っておられることで、その一つの実証にすぎない。それを現実化して実現された。そういうお話だと思います。5章は、38年間病気で苦しんでいた人を癒されたところです。安息日だったので、

「安息日に癒すのはよくない」

といってイエスは責められるわけです。その時に、

「父は今もなお働き給う」

と言って、ずうつとイエスの言葉が続いてくるわけです。そういう内容ですので、今全体的なことを申しましたが、読めば読むほど味わい深いものであり、しかも今度は、イエスという方が——人類愛とかいう愛ではなく——ラザロ、マルタ、マリアという正に血も涙もある人間を、悲しみも痛みもかかえる人間、また時には躓いたり転んだり不信仰に陥ったりいろいろする、そういう人間をそのまま、まるごと深く愛しておられるということに気づいてほしい。

「あれはラザロとマルタとマリアで特別だ。私なんかは愛してもらえない」

なんて絶対に思わないでください。自分がマリアになり、ラザロになり、また働き者の女性ならマルタになり、ということ、それぞれ自分がラザロ、マルタ、マリアになって、イエスの愛を無条件に受ける。それに対するお応えが、マリアをとおしてあの香油を注ぐということになった。讃美歌391番の「ナルドの香油」ではないけれども、「私は自分の心を献げます」という、そういう讃美歌になっているわけです。

現代の世の中で愛が冷え、実に惨憺たる——見方によってはまるで砂漠のような、人と人との心の繋がりも何も失われしまうような——現代でありますけれども、イエスのその愛の呼びかけは永遠に今も語られている。自分がラザロとなり、マルタとなり、マリアとなつて、その聖言を受ける者にはなお繋がっている。愛は断じて滅びない、永遠なんです。そういうものをしっかりと受けとっていただきたい。今、病を身体に持つていらつしやる方も、「このイエスの生命が宿ったら、もうこの地上の相対的な生死は乗り越えている」

問題ではない。それだけのものをイエスは下さっている」

と。そういうものをしっかりと受けとっていただけたらと思う次第です。

始めにちよつと総論的なことを申しましたが、順を追ってみていきたいと思ひます。そして、文語の聖書をお持ちの方は——新共同訳聖書もいけれども——また文語も味が非常に深い。両方を愛用していただきたいと思ひます。特にご年配の方は文語のほうに慣れ親しんでおられると思いますので。そういうことで躓かないでくださいね、「もう文語というのは嫌なんだ」と若い人は言うかもしれない。「これが日本語かいな？」なんて言う人も



ある。でも、立派な日本語ですので、それを受け入れていただきたいと思います。私は両方を見ていこうと思います。

●永遠の生命

ヨハネ伝10章の終わりのところからです。羊と羊飼いのお話があつて、

「ユダヤ人たちはイエスを石で打ち殺そうとして石を取り上げた」

という話が出てきます。39節に、

「³⁹そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

⁴⁰イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行つて、そこに滞在された。⁴¹多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」⁴²そこでは、多くの人がイエスを信じた。」（ヨハネ10・39～42）

そして11章にいきます。

「¹ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。²このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病氣であつた。

この「主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女」というのは、ヨハネ伝ではそれまで全然出てこない。似たような記事は、ルカ伝7章に「罪の女」として書かれている場所があるけれども、私はそれとは全然別個だと思っています。註解書をみましても別個だというふうに説明されていました。12章のところで、この

「主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった」

というのが出てくる。むしろ私はそれを指しているというふうに受けとっています。このマルタとマリア、そして香油のお話はまた後ほど12章のところで、少し他の福音書と照らし合わせながら見たいと思います。ですから、ここではラザロ、マルタ、マリアの三人兄弟姉妹ということで先へ進みます。

³姉妹たちはイエスのもとに人をやつて、「主よ、あなたの愛しておられる者が病氣なのです」と言わせた。⁴イエスは、それを聞いて言われた。「この病氣は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによつて栄光を受けるのである。」⁵イエスは、マルタとその姉妹「マリア」とラザロを愛しておられた。」（ヨハネ11・1～5）

文語のほうで読みますと、

「³姉妹ら人をイエスに遣して『主、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と



言わしむ。⁴之を聞きてイエス言い給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』

なんとなく「文語の響きが」いいですね、「この病は死に至らず」という。「死に至る病」とか、何かキルケゴールの本があるようですね、私は読んでいませんが。

「この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり」

と。9章のあの生まれながらの目の見えない乞食をしていた方に対しても、

「親の罪でもこの人の罪でもない。この人の上に神の業の現れん為である」

と。即ち、「神の栄光のためである」と言われました。ここでも、この絶望的な病、死に至る病であるのにもかかわらず、イエスは「死に至る病ではない。神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり」と言われた。

⁵イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。

と。そして、ラザロは病んでいます、

「⁶ラザロが病氣だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。⁷それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」⁸弟子たちは言った。「ラビ（先生）、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」⁹イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。この世の光を見ているからだ。¹⁰しかし、夜歩けば、つまずく。その人の内に光がないからである。」

註解書「『新約聖書』改訂版、フランシスコ会聖書研究所注」をみますと、

「ユダヤ人は人の目の中に入った光はそこにとどまり、人の理性を照らすと考えていた。イエスはこの譬えを用いて、自分が光として信者の心のうちにとどまり、信者はそれによつて躓くことはない」と教えている」

と、こういう註解を施しています。つまり、人間の目の中に入った光はそこにとどまって理性を照らす、ということのようです。それがこの、

「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。」

この世の光を見ているからだ。

その光が目にとどまるという。

¹⁰しかし、夜歩けば、つまずく。その人の内に光がないからである。」¹¹こうお話しになり、また、その後で言われた。

ここからが大事ですね。

「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」

文語では、



「¹¹……『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さんために往くなり』」
¹²弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。
¹³イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。¹⁴そこでイエスは、はつきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。¹⁵わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」¹⁶すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行つて、一緒に死のうではないか」と言った。
非常に身の危険が迫っているということを弟子も感じているわけです。だから、「イエスさま、あなたがそれほどまでにラザロを愛して、ラザロの所へ行こうと、そんな冒険をなさるなら、私たちも弟子として放っておけません。私たちも一緒に行つて死にます」と、悲壮なる思いですよね。

¹⁷さて、イエスが行つて御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。¹⁸ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。

文語訳では「二十五丁ばかりの距離」、計算すれば5～6kmくらいではないかと思う。
¹⁹マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。²⁰マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行つたが、マリアは家の中に座っていた。²¹マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。²²しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

これは非常に深い信頼を寄せていますね。

²³イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、²⁴マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。²⁵イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。²⁶生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」²⁷マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に來られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

このイエスのお言葉ですね。文語訳で読むと、

「²⁵イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。²⁶およ凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』」

と。これをこのまま論理的に読みますと、さっぱりわからない。私は何度読んでもわからなかつた。註解書を読みますと、この前半部の、



「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん」

これは復活のことを指している。今、イエスが甦らそうとなさっているラザロは死んでいる。しかし、私を信するならば、こんなラザロだって甦るんだと。ラザロを甦らせるということを通して、人はたとえ死んでも、イエスの御力によって復活させられるという、そのことを指している。後半部の、

「凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし」

という、「凡そ生きて我を信する者は」というのは、もう既に永遠の生命を持っている信者たち、皆さん方、既に永遠の生命をいただいている者は、たとえ身体は滅びても決してその人の人格、霊、本体は滅びない永遠の生命である。身体は、なるほど脱落していくでしょう。でも、その人の生命は永遠である。そしてやがて霊体を授けられる。そういうふうなことを指している。どっちにしても、これは非常に力強い言葉です。

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか」

と。本当にイエスという方の中に宿っている生命というのは、もうこの世の肉体の命を超越した、正に永遠の生命なんです。イエスという方にとつては、肉体をとつて地上に居ろうと、肉体を離れて天界に行こうと、同じ永遠の生命というものが貫いている。現象形態というのは、外に見えている姿は肉体をまとった姿であるのか、それとも、それを脱ぎ捨てて本当の霊体をまとわれたあのご復活された栄光のお姿なのか。その違いはあつても、中を貫いているものは同じなんです、永遠の生命です。

「この地上の命は死んだらもう何もかも無くなってしまう。地上に生きている間が
この世の華、もう死んだらどこへ逝くのかわからない。墓に葬られ土に還つてしま
う。その先は真つ暗です」

というのが、我々の相対的な生命体としての人間の自然な思いです。でも、

「やつぱりそれは嫌だ、それで終りたくない！」

という、叫びが我々の心にあるんですよ。そうじゃありませんか？ 私はそうなんです。自分自身もそうだし、また愛する者との別れは避けるべくもない。必ずやつてきます。できたら一緒に死んで、一緒に天国へ行きたいけれども、なかなかそうはいかない（笑）。

我々は自分にせよ、愛する者にせよ、必ず死ぬ。そして向こうの世界のことは、現実には我々は何も知らない。福音書を通して、キリストの言葉を通して、「向こうの世界があるんだよ」ということは聞かされていまして、現実に見てはおりませんし、臨死体験をして向こうへ行つて、見てきてまた戻ってきたという、宇宙飛行士みたいなことがみな許されるなら、これは非常にありがたいけれども、それはごく一部の人のしか許されていない。そういたしますと、私たちは正に「見ずして信する」という、心の目をもつて、霊の目をもつて向こうの世界を透視するという、それしか手はないわけです。しかし、それが本当に確かな



ものかどうか、これは分りません。

ところが、そこにイエスという方が出てきてくれた。本当にイエスという方が出てきてくれて、

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。²⁶ 凡そ生きて我

を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか」

と迫ってこられたら、もう「はいっ」と言うしかないですよ。

「それください！ それを私にもください！」

「そうだよ、それを与えるために、私はこの世にやって来たのではないか。天の御座を捨てて、この地上におりてきた。清らかな天上に比べれば、この地上はなんと罪だらけなことか」

と。実にこの地上という所はゴタゴタゴタと、ややっこしい所なんです。人の心も、ある程度は信じて、「主さま、主さま」と言っているけれども、もう別の時には、「十字架につけろ、十字架につけろ！」と叫ぶような、これが人間の姿でしょ。少し自分に不如意なことが起これば、

「私についてないわ、神も仏もあるもんか！」

なんていうようなことを言い出す。これが人間なんですね。また、愛する者と別れる時には、もう悲しくて悲しくて、

「そんな永遠の生命があるとか、向こうに天国があるとか、そんなのは今は関係ない。私はこの人を失って、この子を失って、私は悲しい。悲しみのどん底だ」

と。これが人間ではないでしょうか。それを癒すのものは、月日つきひしかありませんね、地上では、それを、

「天国があるんだから、あなたは泣いてはだめ。泣くのは不信仰よ」

なんて、そんなことは言わない。イエスはそんなことを仰らない。一緒に涙を流してください。

マルタのときはまだ流しておられない。マリアが泣いているのを見て、涙を流された。だから、マリアのほうをより深く愛しておられたのではないかなと、私は勝手に思っているけれども(笑)。

イエスという方は本当にそういうように、人の情を備えた方。人の痛み、悲しみ、涙、それを己が痛み悲しみ涙としてお受けとりになる方。つまり、相手と一体になってしまふ、そういうお方です。愛というのはそういうものではないでしょうか。別々にバラバラでいて、遠くから「愛しているよ」というのではなくて、本当にその人の所へ駆け寄ってきて、その人と一つになっている。

「死なばもろとも、生きるのも一緒」

という、何かそういう一体感を持たしめてくれるもの。これが私はやはり、愛というもの



の本質だと思う。

お母さんというのは子供に対して強いのは、

「もともと私のお腹なかの中に居たんだ、一つだったんだ」

という、その信念があるからだと思う。だから、どんなに大きな大人になっても、「あんたは私のお腹の中にいたんだよ。あなたを産んだのは私よ」なんて言って、相手が総理大臣であろうが何であろうが、そんなことは関係ない。「バカッター！」と怒鳴りつけるのは母親ですよ。そういう一体感というものです。

このイエスという方は正にお父さま、神さまの懷にいだかれていたお方だと言われている。母子一体という言葉があるけれども、聖書のほうは父子一体です。

「父ふとこの懷むちにいます独子ひとりごの神なる方がイエスである」

とヨハネ伝第1章に書かれています。そのことをイエスは自覚なさるから、

「父と我とは一つなり」

と仰ったでしょ。

「私がやっている業わざは全部、自分から出ていない。すべて、父なる神さまが私を通して、『これをしろ、これを語れ』と仰おほなっていることをそのまま私は行おこなっているだけだ」

と。およそ「自分」というものがないわけです。不思議ですね。今みたいに、「自分、自分、自分」と言う時代とまるで逆なんです。そしたら、イエスという方は空洞であって何も無い方かという、そうじゃない。さつきから申していますように、実に愛が深く、情があつく、人の思いをわが思いとして受けとり、一緒に傷いたみ悲しみ苦しむことのできるお方ですよ。そのお方がいざ神さまの御業みわざ、神の御意みこころということになったら、本当に神さまがオール、すべてなんです。しかも、その神さまというのは我々にとってはわからない、得体の知れない神さまですよ、我々からみたら。ところが、そのお方をご自分の中にしっかりと受けとって、

「私を見た者は父を見たのだ。父が私を愛されたように、私もお前たちを愛し

た。この愛の中にとどまっていなさい」

と言われた。イエスが我々を愛してくださったのはよくわかります。父なる神はイエスをそのように深く愛された。だから、同じ愛をもつてイエスは我々一人ひとりを愛してくださった。そういう不思議なお方なんです、イエスという方は。ですから、このイエスが、

「我は復活よみがえりなり、生命いのちなり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。²⁶ 凡およそ生きて我を信ずる者は、永遠とこしえに死なざるべし。汝これを信ずるか」

と仰った。私も、

「はい、よくぞ来てくださいました。私の心の奥の一番の欲求に、よくぞ応えてくださいました。死にたくない、死んで終りたくないという、この思いにあなたは



応えてくださいました」

と。しかも、こちらの器がどんな器であろうと、それを問題になさいません。愛と信、信と愛、これだけなんです、イエスという方との結びつきは。過去の自分がどうであろうと、素性がどうであろうと、血統がどうであろうと、そんなことは関係ない。ヨハネ伝の第1章に出てきますね。

「¹³かかる人は血脈ちすじによらず、肉の欲ねがいによらず、人の欲によらず、ただ、神によりて生れしなり」(ヨハネ1・13)

と。ただその方を受け入れる、信ずる、その方の愛を受けとるということによって、神の子となる特権を与えてくださったという。

●「ラザロよ、出てこい」

「²⁷彼いう『主よ然り、我なんじは世きたに来るべきキリスト、神の子なりと信ず』
²⁸かく言いて後、ゆきて竊ひそかにその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。²⁹マリヤ之をきき、急ぎ起たちて御許みもとに往けり。³⁰イエスは未だ村に入らず、尚なほマルタの迎えし処に居給う。³¹マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎なげかんとて墓に往くと思いて後に随したがえり。³²かくてマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下あしもとに伏し『主よ、もし此処ここに在いましならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。」(ヨハネ11・27～32)

口語の方で読みましょう。

「²⁸マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいまして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。²⁹マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。³⁰イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。³¹家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。³²マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに」と言った。³³イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、³⁴言われた。」

この「心に憤りを覚え」というあたりは、聖書の註解者によって少しずつ違っていている。文語の聖書では、

「³³イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷いため悲しみて言い給う」



と、「心を傷め悲しみて言い給う」とある。「憤り、興奮して」とかいうのはちよつと私からみたらピンとこないように思う。註解者たちは、「その死というものに対して憤激された」とかいうふうに解釈する。

「ラザロが死んでいる。それは事実で、それを見て、マリアも悲しみ涙を流し、周りの人も泣いている。死というものはなんと残酷なものであるかと、これに対してむかつ腹をたてた」

という感じで、「憤激した、興奮した」とかいう言葉を使つて訳している。ところが、私は文語の方の「心を傷め悲しみて言い給う」というのが好きですね。これは好き嫌いの問題ですので、皆さん、どうぞご自由にお考えなつてください。もう自分がその主人公になるしかないですよ、こういうドラマですからね。

だいたい、ヨハネ伝というのは、「ある日」とか、「それから三日たつて」とかいう。「それから」とはいつからなのかよくわからない。ちようど、「昔、昔、ある所にお爺さとお婆さんとがありました」みたいな感じなんです。全然その日にちの特定はできない。ただ、「逾越の祭りの六日前」というのは、はつきりするけれども。そうでないのは、なにか「それから」とか、「ある日」とか、そんなことですから、日にちはどうでもいい。場面、場面を非常に立体化して浮かび上がらせている。その中に自分も入つて、自分がその主人公になる。そういう思いでこれを受けとつていただきたいなとおもう。

「³³イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、³⁴『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』³⁵イエス涙をながし給う。」

ここですね、先ほどらい申してますのは。

「³⁴言われた。」「どこに葬つたのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言つた。³⁵イエスは涙を流された。³⁶ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言つた。³⁷しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか」と言う者もいた。³⁸イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。」

文語で読みますと、

「³⁶ここにユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』³⁷その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』³⁸イエスまた心を傷めつつ

ここも「心を傷めつつ」とあります。

墓にいたり給う。墓は洞にして石を置きて塞げり。³⁹イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』⁴⁰イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言ひしにあらずや』



41ここに人々石を除けたり。」

口語では、

「38イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。39イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいいます」と言った。40イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。41人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。

これがイエスのお祈りです。

「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。42わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」43こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。44すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどこいてやって、行かせなさい」と言われた。」

文語で読みますと、

「イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。42常にきき給うを我は知る。然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の為に、汝の我を遣し給いしことを之に信ぜしめんとてなり』43斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来れ』と呼わり給えば、44死にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出て来る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。」

非常に感動的な場面です。

「ラザロよ、出てこい！」

と。私たちがいろんなことで失望落胆しますとき、絶望のどん底に沈むとき、この「ラザロよ、出てこい！」と。いつまでも自分の中に、自分の殻に閉じこもるのではない。悲しみは悲しみとしてわかるよ。痛みは痛みとしてわかる。また自分に失敗があつて、自分を責めて責めて、「もう立ち上がれない」という気持ちでうちひしがれている。現実が現実だ、しかし、「ラザロよ、出てこい！」と。その中から呼び出し給う、墓の中から呼び出し給う。このイエスの吸引力、言葉に生命がある。

「わが言は霊なり生命なり」

と言われたでしょ。

「人を生かすものは霊である。私が語った言葉は霊であり命である」



と、6章の終りのところに出てきます。正にイエスは、「ラザロよ、出てこい!」と叫ばれると、臭くなっている死人が甦って出てくる。多くの人は「そんなことはあるものか」と思うかもしれません。私はこれをそのまま受けとります。

「あなたはそういうお方だからこそ、あなたは頼りになるお方です」

と。何も死者が復活するという形で表われなくても、本当に絶望のどん底にうちひしがれている人が、生き生きと生き返って動きだす。勇気をもつて新しい人生へと向かっていく。これが死人の復活よみがえりでなくて何でしょうか。そうでしょ。現象面ではなくて、本質なんです。イエスという方に触れていただくと、御言が魂に届くと、変貌する。変質変貌するんです。自分の殻にとどまっていたら、そのままです。けれども、このイエスの言葉に「はいつ」と言つて、自分でぶつかつていけば、あるいはそれを受け入れれば、我々は内側から変わるんです。それだけの力を持つていてくださる。それが生命の言なんです。

「わが言は靈こゝろなり生命いのちなり。汝これを信ずるか」

と。「はい」と言う。そのようにして、皆さん、毎日毎日、こういうイエスという方と一緒に旅をする。毎日毎日、御名を讃えながら歩いていく。イエスのほうから近づいて来てくださっているんです。

「ラザロが死んだ。さあ、これからラザロを呼び起こしに行こう、呼び覚ましに行こう」

と、イエスのほうから近づいてきた。ラザロが呼んでいるのではない。ラザロはもう臭くなっている。そこへイエスの方から、イエスの愛がラザロの所へ行かしめる。弟子たちは身の危険を感じて、「危ないですよ、もう止めやましょうよ」と。それでもイエスは敢然とそこへ行き給う。弟子たちも「では、私たちも一緒に死のう」と、悲壮な思いで行く。でも、イエスにとっては全然、悲壮感はない。

「神の栄光がそこに現れる。人の子の栄光が現れるんだ」

と言つて受けとめておられる。こういうイエスです。墓の前で、「ラザロよ、出てこい!」とおよそ、絶望とか、「もうだめだ」ということがないんです、イエスの場合には。

「ご自分はどうかという、今度は12章へいきますと、

「一粒の麦となつて死ぬ」

という。ラザロを甦らせて生命を与えた方が今度は、自分是一粒の麦となつて死ぬという。ラザロを生かした。それはこの世の命を与えられた。もう一度、この世の命を与えられた。そのイエスは、「自分は一粒の麦となつて死ぬ」、この世の命を失う、自ら選んでそれを捨てるという。

「²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯ただ一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。」(ヨハネ12・24)

と仰つた。私はそのコントラストに感動する。人を生かしたイエスは、自分をそのように



犠牲にして葬って墓にくだる。陰府^{よみ}にくだる。しかし、神さまは放っておかない。今度は神さまが、

「イエスよ、出^いで来^{きた}れ！」

と。そして、イエスは現れてきたではないですか。「イエスよ、出^いで来^{きた}れ！」と。イエスは三日目に甦^{よみがえ}って霊体となつて現れてきた。

今度は、イエスに出会ふのは、ヨハネ伝では「マグダラのマリア」という、それまで出てこなかった女性です。「マリアよ!」「ラボニ!」と、この呼びかけですよ。

「マリアよ!」

という御声^{みこゑ}によつて、

「ああ、先生(ラボニ)！」

と。この愛はやはり永遠なんです。そういう地上ならざる次元の本当の愛のドラマ。愛の生命、永遠の生命。それをヨハネ伝は展開してくれている。

信ずる者は信じてください。私は信じています。これでないと、地上に命をいただいた意味はない。こんな死んで墓に葬られて「さよなら」では——弔辞だけ読んでもらつて——

「先生、安らかに眠りください」なんて嫌ですよ、私は眠らないよ。

永遠の生命です。普通の人間には望み得べくもない、諦めるほかない、そういう我々の日常生活でありますから、イエスという方はそれを突き破つて、本当の生命を現わしてくださった。

「生命と不死を現わし給えり」

と、テモテ書簡にも出てきます(テモテ6・16)。

クリスチャンとは何かというと、それを素直に信じているひと、それだけです。他に取柄はないんですよ——「取柄がない」といったら言い過ぎかもしれないけれども——他に変わったことはない。ただイエスという方を本当に愛して信じている。マルタとなりマリアとなりラザロとなつて、イエスを信じ、イエスのお言葉をそのまま身に受けとる。永遠の生命を頂いて、永遠にイエスと共に生きる。こういう人種がクリスチャンという人種なんです。どんな立派な事をしたのか、そんなことは知りません。ただイエスという方の生命を頂いたら、イエスという方と同じような生き方をせざるをえない。

それまでの自分というのはエゴイストでした。どうしても、自分が先立ちます。自分の名誉とか、自分の業績とか、自分の何とかと、常に「自分、自分、自分」というのが付いてます。ところが、このイエスという方にぶつかつたら、そんなものはどうでもいい。もうこの世のそういうことはどうでもいい。プラスであろうが、マイナスであろうが、超越した絶対愛の次元から、絶対の生命の次元から、イエスという方は私になくはならないものをくださっている。そして

「お前と私は一つだよ、一緒に行こう」



と、向こうから駆け寄ってきて抱きしめてくれる。あの十字架上の片一方の盗賊もそうです。最後の最後まで、あれは悪事を働いていたようです。ところが、十字架の横で、真中にイエスがいらつしやる、自分はその横に付けられている。イエスを仰ぎ見て、

「申し訳ありません。私は本当にマイナスばかりの生活で、こんな最後は惨めな姿です。でも、あなたは違います。なのに、こんな私の罪びとと一緒に
おかりくださっている。どうぞ、こんなやつが傍そばにいたということを憶おぼえてください」

と。そう言ったら、イエスは

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

と。何一つ善いことはしてないのに心砕けて、「イエスよ、私を覚えてください」と。それに対して、「汝、今日、我と共にパラダイスなり」と。イエスがご復活なさった時に、彼を抱きしめて昇って行つてくださった。復活されたイエスの周りにその片一方の盗賊がいたとは書かれていません。彼は霊になつてしまったんでしようけれども。いわゆる肉体の復活ではありませんから、彼は死んだだけでも。でも、永遠の生命をいただいている。

そういうイエスという方の無限の愛。よく、「愛は死よりも強し」とか、「愛は永遠なり」とか言いますが、これはイエスにおいて初めてそれが実現している。そういうふうに私は受けとっているんです。

それから、先をいきましょう。口語の方で読んでみます。

「⁴⁵マリアのところに来て、イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。⁴⁶しかし、中には、ファリサイ派の人々のもとへ行き、イエスのなさったことを告げる者もいた。⁴⁷そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。⁴⁸このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。」⁴⁹彼らの中の一人で、その年の大祭司であつたカイアファが言った。「あなたがたは何も分かつていない。⁵⁰一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなたがたに都合だとは考えないのか。」⁵¹これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であつたので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言つたのである。⁵²国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言つたのである。⁵³この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ。

早くから、「イエスを殺そうとたくらんだ」ということが出てくる。38年間病んでいた人を癒された。それがイエスであつた。そして安息日であつた。

「父は安息日も働いておられる。だから、私も働くんだ。父と私とは一つであ



る」

と。その言葉を聞いて、「安息日を破った」ということと、「己れを神と等しいものにした」という、この二つの罪名によってイエスを殺そうとしたということが既に5章に出てきている。今度はまた、このラザロの復活という事態に直面して、ますます人々はイエスの方へ流れていく、そこではつきりと具体的に殺害計画を立てるわけです。

⁵⁴それで、イエスはもはや公然とユダヤ人たちの間を歩くことはなく、そこを去り、荒れ野に近い地方のエフライムという町に行き、弟子たちとそこに滞在された。

⁵⁵さて、ユダヤ人の過越祭が近づいた。多くの人が身を清めるために、過越祭の前に地方からエルサレムへ上った。⁵⁶彼らはイエスを捜し、神殿の境内で互いに言った。「どう思うか。あの人はこの祭りには来ないのだろうか。」⁵⁷祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである。」(ヨハネ10・45～57)

不思議なことですね。イエスが善いことをなさればなるほど、人々のイエスに対する敵意、殺意が強固になっていくという、この事実なんです。イエスという方は本当に父の御声に、御意に従ってだけ動いておられる。己れ自身からは何も出ていない。にもかかわらず、宗教的リーダーたちから見たら、イエスという方の存在が目障り^{めざわ}で仕方がない。やがて自分たちの地位が危なくなる。だから、イエスを殺そうというふうになります。結局していくということになります。

●ナルドの香油

12章にいきます。

「¹過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。²イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。³そのとき、マリアが純粹で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りであふれた。⁴弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。⁵「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」⁶彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていたからである。⁷イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。⁸貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒



にいるわけではない。

⁹ イエスがそこにおられるのを知って、ユダヤ人の大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。¹⁰ 祭司長たちはラザロをも殺そうと謀った。¹¹ 多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行つて、イエスを信じるようになったからである。』(ヨハネ12:1～11)

ここまでは、ラザロ、マルタ、マリアを軸とした物語なんです。イエスの最後の晩餐の近く、この逾越祭の前、その時に「香油を注いだ」という話は他の福音書にも出てくる。でも、このヨハネ伝はそれをまた独特な書き方で書いています。

マタイ、マルコ、ルカを見てみたいと思います。まず、ルカの7章36節、

「³⁶ここに或^{ある}パリサイ人ともに食せん事をイエスに請^こいたれば、パリサイ人の家に入りて、席につき給う。³⁷視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席にい給うを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり、³⁸泣きつつ御足近く後にたち、涙にて御足をうるおし、頭の髪にて之を拭い、また御足に接吻して香油を抹^ぬれり。³⁹イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言う『この人もし預言者ならば、触^{さわ}る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』⁴⁰イエス答えて言い給う『シモン、我なんじに言うことあり』シモンいう『師よ、言いたまえ』⁴¹『或債主^{かしぬし}に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、⁴²償^{つぐな}いかなければ、債主この二人を共に免^{ゆる}せり。されば二人のうち債主を愛する者と孰^{いづれ}か多き』⁴³シモン答えて言う『われ思うに、多く免されたる者ならん』イエス言い給う『なんじの判断は当れり』⁴⁴かくて女の方に振向きてシモンに言い給う『この女を見るか。我なんじの家に入りしに、なんじは我に足の水を与えず、此の女は涙にて我足を濡^{ぬら}し、頭髮^{かみのけ}にて拭^{ぬぐ}えり。⁴⁵なんじは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。⁴⁶なんじは我が頭に油を抹^ぬらず、此の女は我が足に香油^{においあぶら}を抹れり。⁴⁷この故に我なんじに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大^{おお}なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し』⁴⁸遂に女に言い給う『なんじの罪は赦されたり』⁴⁹同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰なるか』と言い出づ。⁵⁰ここにイエス女に言い給う『なんじの信仰なんじを救えり、安らかに往け』(ルカ7:36～50)

ここも非常に感動的な場面です。しかし、ここで言われている女性は、名前も出てきておりません。ただ「罪ある一人の女」と書いてあるだけです。しかも、シモンというパリサイ人が招いたその家にイエスが居らっしゃるということを聞きつけて、ここへやって来



た。おそらくその前に、このイエスの御言を聞いて、涙を流した女性だと思えます。しかし、人々からは「罪の女」として爪弾きつまはじされるような生活、あるいは素性の女すじょうのようです。しかしながら、その女性はたった一人イエスという方が自分を見て、自分を愛してくださった、罪を赦してください、そのことを感じて、いわばご恩返しという感謝の気持ちで、このシモンの家にやって来たのではないかと私は想像している。そして、入ってくるや、香油の入った石膏の壺を持ってきて、泣きながら、涙で御足をうるおし、頭髮でこれを拭い、御足に接吻して、香油を塗るという姿です。

当時の食事というのは、テーブルに座らないで、ダランと横になって、腕枕うでぐさをしながら食事をしたということが言われている。だから、そこへ来て、御足をうるおし拭ぬぐったり、接吻したりというのはごく自然なんでしょうね。ところが、このシモンというのは、自分が招いておきながら、水一杯与えない、接吻もしない。いかにも敵意がまるだしという、そういう姿です。それをイエスはことごとく対比しながら、

「あなたは水一杯さえもくれなかったが、この人はこうしてくれた。あなたは

こうしなかったが、この人はこうしてくれた」

と、そのコントラストが、これでもかこれでもかと出ているわけです。この辺は私はルカ独特だと思う。とにかく、この女性のひたむきなイエスに対する感謝の思い、それをイエスは受けとって、

「愛することが多いから、この人の罪は赦されている。愛することが多い者は、罪赦されることもまた多い」

と言う。罪がたくさん赦されているから、それが感謝の思いとなって、愛となって現れてくる。だから、罪の自覚症状が全然ない人はイエスのことを何とも思わない。でも、イエスからそうやって赦された、あるいは癒された、そういう何か自分がお恩を受けたということを通して深く感ずれば感ずるほど、イエスに対して何かしたいという愛の思いが湧いてくる。こう思うんですね。

「多くの罪が赦されている。これだけ多く愛するというのは、それだけ赦しというものを深く受けとっているからだ。赦されることの少ない者は愛することもまた少ないんだ」

と。そしてはつきりところで、

「罪は赦された。あなたの信仰があなたを救った。あなたがひたむきに私を慕い求めてきた。それで充分だ。安らかに往きなさい」

と宣言なさった。この女性のことと、あのマリア、マルタとは係わりはないと私は思っている。そのあと、この女性のことはこれっきりしか出てこない。他の福音書をみますと、ルカの福音書では、最後の晩餐のところでは全然、香油を塗るということは出てこない。ところが、マタイとマルコをみますと、最後の段階で出てくる。



それはまずマルコ伝14章、これを下敷きにして、マタイ伝26章に全く同じ記事が出てくる。マルコ伝14章を見てみましょう。これも文語の方で読んでみます。

「¹さて過越^{すぎこし}と除酵^{じょじょう}との祭の二日前となりぬ。祭司長・学者ら詭計^{たばかり}をもてイエスを捕え、かつ殺さんと企てて言う。²『祭の間は為すべからず、恐らくは民の乱あるべし』」

³イエス、ベタニヤに在^{いま}して、癩病人シモン^{シモン}の家にて食事の席につき居給うとき、或女^{ある}、価^{あたい}高き混^{まじり}なきナルドの香油^{においあふら}の入^いりたる石膏の壺^きを持ち来り、その壺を毀^{こぼ}ちてイエスの首に注^{こうべ}ぎたり。⁴ある人々、憤^{みだり}おりて互に言う『なに故かく濫^{みだり}に油を費すか、⁵この油を三百デナリ余に売^うりて、貧しき者に施すことを得たりしものを』而^{いた}して甚^{とが}く女を咎^{とが}む。⁶イエス言い給う『その為^なに任せよ、何ぞこの女を悩^{なやま}すか、我に善き事をなせり。⁷貧しき者は常に汝らと偕^{とも}におれば、何時^{いつ}にても心のままに助け得べし、されど我は常に汝らと偕におらず。⁸此の女は、なし得る限りをなして、我が体^{からだ}に香油をそそぎ、あらかじめ葬^{そなえ}りの備^{そなえ}をなせり。⁹まことに汝らに告ぐ、全世界いずこにても、福音^{のべつた}の宣^{のべつた}伝えらるる処には、この女の為しし事も記念として語らるべし』

¹⁰ここに十二弟子の一人なるイスカリオテのユダ、イエスを売らんとて祭司長の許^{もと}にゆく。(マルコ14:1～10)

場面はヨハネ伝と非常に似ているんですが、まず場所はベタニヤ、これは一緒です。ところが、「癩病人シモン^{シモン}の家」とある。ラザロではないんです。「或女^{ある}」とだけ書かれていて、「マリア」とは書かれていない。でも、していることは非常に似ているわけです。

「石膏の壺^きを持ち来^{きた}り、その壺^きを毀^{こぼ}ちて」

とある。

ここを小池先生は『無者キリスト』の中で書いておられる。「壺^きを毀^{こぼ}ちて」ということは、二度とこのナルドの香油は使うことはない、これが最後だと。このナルドの香油は物凄く高価なものだという。「三百デナリ余」というと、一デナリは労働者の一日の賃金ですから、今でいえば三百万円かもしれない。非常に高価なものだそうです。そのナルドの香油は女性の宝物なんです。それを惜しげもなく壺を壊して、

「これでもう使うことはありません」

と、この香油を注いで、「これであなたと一緒に私も死にます」という、その愛の告白なんですよね。それをイエスはしっかりとキャッチされた。

「私のために葬^{くわ}りの備えをしてくれた」

と。イエスは罪人として十字架に付けられる。だから、手厚い葬りなんてとても期待できない。それを女性の直感で察知して、この壺を壊し香油を注いだ。それ自体が非常に感動的な場面です。心を打たれたイエスは、本当にその心を受けとるお方だということになり



ます。

「⁸此の女は、なし得る限をなして、我が体^{からだ}に香油をそそぎ、あらかじめ葬りの備^{そなえ}をなせり。⁹まことに汝らに告ぐ、全世界いずこにても、福音の宣^{のべつた}伝えらるる処には、この女の為しし事も記念として語らるべし」

マタイ伝26章もほぼ同じです。「壺を毀ちて」という言葉は出てこないだけで、ほぼ同じです。で、繰り返しません。このマルコにせよマタイにせよ、「ある女」ということだけあつて、名前が出てこない。ところが、このヨハネ伝でははっきりと、ラザロの姉妹マルタ、マリアという、ラザロの所で食事をなさっていると記されている。そして、そのマリアが香油を注いでいる。それを皆さん取り上げて、

「聖書なんてでたらめだ。不一致もはなはだしいではないか」

と、そういうふうに出てくるとはしないでください。マルコはマルコらしく書いた。ルカはルカらしく書いた。ヨハネはヨハネらしく書いた。どれもこれも本当と受けとつていいのではないのでしょうか。私はヨハネのこの記事が大好きです。ラザロ、マルタ、マリアのこの三人兄弟姉妹が軸となつて動いていると思ひました。そういう展開が素晴らしいと思う。他の福音書は、そんなことは出てこない。偶然、「ある女」が出てきて、香油を注いだというお話になっている。ヨハネの方は、ラザロの復活から始まつて、そしてラザロが甦^{よみがえ}られ、それがとどめとなつて、イエスが殺されようとした。そのイエスの最後の場面のところへ、イエスがそのベタニヤに來られた時に、そのベタニヤでもてなしを受けているのはこのラザロの家で、復活したラザロがそこにいた。マルタ、マリアが給仕をしている。

●一粒の麦、地に落ちて死なずば

ルカ伝の方で出てくるマルタ、マリアは、やはりイエスがずっと旅をしておられると、その途中で立ち寄られているけれども、これもルカ伝の書き方というのは——ちよつとおかしいといつたら言い過ぎですけれども——ちよつと見てみましょうね。ルカ伝の方では帰るところで出てくる。9章51節に、

「⁵¹イエス天に挙げ^あげらるる時満ちんとしたれば、

「天に挙げらるる時」というのは十字架です。これが近づいたことをお感じになつて、

御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、

そういう決意を固められた。

⁵²已に先だちて使^{つかい}を遣^{つか}はしたもう。彼ら往きてイエスの為に備えをなさんとて、

サマリヤ人の或村に入りしに、⁵³村人そのエルサレムに向いて行き給うさまな

るが故に、イエスを受けず、」

ルカ伝の9章のところからイエスは決然とこれからエルサレムへ向かつて旅をするという設定なんです。ところが、なかなかエルサレムに到達しない。その間にいろんな出来事が、



いろいろなお話が出てくる。10章38節のところでマリアとマルタが出てくる。

「³⁸かくて彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給えば、マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。³⁹その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きおりしが、……」

ここが有名なマルタとマリアのお話です。マリアとマルタについてはここしか出てこない。このように福音書によつて、それぞれ視点が違う。ヨハネ伝では、マルタとマルタというのは、ラザロの復活というところに出てきて、それが12章につながって、そして、マリアが香油を注ぐということになっているので、それに従つてこれから見ていきたいと思ひます。

「¹過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。²イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。³そのとき、マリアが純粹で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持つて来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐつた。家は香油の香りでいっぱいになった。⁴弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。⁵「なぜ、この香油を三百デナリオンで売つて、貧しい人々に施さなかつたのか。」⁶彼がこう言つたのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であつて、金入れを預かつていながら、その中身をごまかしていたからである。⁷イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取つて置いたのだから。⁸貧しい人々はいつともあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

⁹イエスがそこにおられるのを知つて、ユダヤ人の大群衆がやつて来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあつた。¹⁰祭司長たちはラザロをも殺そうと謀つた。¹¹多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行つて、イエスを信じるようになったからである。

¹²その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、¹³なつめやしの枝を持つて迎えに出た。そして、叫び続けた。「ホサナ。主の名によつて来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。」¹⁴イエスはろばの子を見つけて、お乗りになつた。次のように書いてあるとおりである。¹⁵「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗つて。」¹⁶弟子たちは最初これらのことがわからなかつたが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々



がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。¹⁷イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。¹⁸群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである。¹⁹そこで、ファリサイ派の人々は互いに言った。「見よ、何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったではないか。」

このイエスを迎える時、イエスが「ろばの子に乗って」お入りになる。これはマタイ伝21章、マルコ伝11章、ルカ伝19章というふうに、新共同訳の聖書ではそういう関連箇所をちゃんと注記されています。いわゆる「イエスのエルサレム入城」などと呼ばれている箇所です。

²⁰さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上つて来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。²¹彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。²²フィリポは行つてアンデレに話し、アンデレとフィリポは行つて、イエスに話した。²³イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。²⁴はつきり言つておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。²⁵自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保つて永遠の命に至る。²⁶わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

聖書学者たちはこの

「ギリシア人がここへやつて来る」

というのを非常に重んじています。それまでは大体、ユダヤ人の、せいぜいサマリア人とか、そういうユダヤ系の人たちの中での福音の伝達であつたわけですが、ここでギリシア人がやつてきて、「イエスにお目にかかりたい」と言っている。そのことによつて、イエスの福音が実にユダヤを超えて、全世界に広がっていくという、その兆し^{きざし}がここに出ている。それを表わそうとしているんだというふうに解説している。ギリシア人は直接にイエスの所に行けないものですから、アンデレとフィリポを仲介者としてイエスに会おうとするわけです。

そのあとが大事なところです。「一粒の麦」のところ。ここからはそちらの主題に入ります。文語のほうで読みますと、

「²³イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果^みを結ぶべし。²⁵己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世に



てその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。²⁶人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、我が父これを貴び給わん。²⁷今わが心さわぐ、われ何を言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。²⁸父よ、御名の栄光をあらわし給え』(ヨハネ12・23～28)

この「一粒の麦」というところは私の大好きなところでした。ここではつきりと、この世の命、私たちが頂いている相対的な命に固執して、それにしがみついていたなら、それで終わり。発展性が全くない。ところが、

「この世の命を憎め」

とまで言われています。その執着心から解き放されて、自己愛というものから解放されて、そういう古いものが死んだら、本当の永遠の生命の実を結ぶ。自分が一粒の麦となって地に落ちて死ぬことによつて、多くの新しい命が芽生えてくる。そのことが言われています。これは私たちクリスチャンが正に、

「あなた方一人ひとりは一粒の麦となるんだよ。私が一粒の麦となつて命を捨てたように、あなた方も地上にありながら、生きざまとしては常に一粒の麦の思いで、己れを求めないで、神の栄光のためにまた他者への愛の中に生き抜くように」

という言葉というふうに私は受け取りたい。それから、これは決して自分が死ぬことばかりを言っていない。皆さんはいろんな職業に携わっておられる。その職業に携わるその携わり方は、己が栄光とか、己れをでかくするとか、そういう自己展開ではなくて、自分はどこまでも神さまの天命に従う、神さまがこの仕事を喜んでくださるからこの仕事において神さまに仕える。自己満足ではない。

「御意にかなうならば、これを祝福したまえ」

という気持ちで、自分を献げた気持ちで、仕事に携わる。そうしますと、多くの実を結んでくれる。ところが、自分の栄光とか、自分の業績とか、自分の名をあげるとか、それを目的にしてやっていたら、見栄えはよくても、それつきりだよと。そういうことを示しておられると思う。

クリスチャンがこの世に生きるということは常に二重性を持っています。我々の慕うところは御国なんです。キリストのいらつしやる世界です。しかしながら、私たちはこの地上に置かれています。地上の命を頂いています。この命を大切にいたします。ただ、「大切にする」ということは、それにしがみつくということではない。その命は常に献げています。キリストに献げていますという自覚をもつてする。もつと言いますならば、

「生殺与奪の権はあなたが握っておられる。生くるも死ぬるもあなたの御意次第です。あなたが欲し給うならば、私をいつまでも地上に置き給うでしょうし、あなたが欲し給うならば、明日にでも天に召されるでしょう」



という、そういうふうにして、自己執着を持たない。「御意のままに」という、これが一番強い。御意のままにと、そうして委ねていくならば、神さまはご自分が好きなように、この私というものを用地給う。皆さん一人ひとりを用地給う。

プロ野球が私は大好きです。選手をどういうふうに使うか、監督の思いと選手の心がピタリ一つであると、物凄くそのチームは強くなる。監督の思うがままに選手が動く。選手も監督の心を体してプレーをする。それがピタッと一つになると、そのチームは強い。ところが、個人プレーばかりやって、己れのことばかりやっているチームはガタガタになります。だから、そこに出てくるものは何かというと、監督と選手との信頼関係です。信義、信愛なんです。

私たちは今、この世にあつて、これでいきたい。狼の中に我々は放り込まれているようなものなんです。だから、

「蛇のように^{さとし}聡く、鳩のように素直であれ」

という。神さまに対しては鳩のごとく従順であれ。この世の者たちには^{だま}騙されるなよ、蛇のごとく聡くあれよ、ということをやった。

●信愛と信義

ラザロとマルタ、マリアの話に戻りますけれども、私が思いますのに、この「愛」というのはどこに成り立っているか。やはり一番我々の思うのは、男女間の異性の愛でしょう。これが人間にとって一番悩ましいことなんです。こつちを立てればあつちが立たずという、いろいろ葛藤があるわけです。イエスという方において、どうしてあんなに多面的な愛が成り立つのだろうかと思ふ。さつきから、「ラザロを愛し給えり、マルタを愛し給えり、マリアを愛し給えり」とある。また、マグダラのマリアも出てきますしね。いろんなのが出てきます。ルカ伝の「罪の女」も出てきます。

私は、異性の間の、男性と女性の異性の間で成り立つ関係というのは、信愛だと思います。イエスの愛に対して信をもつて応える。それが愛につながっていく。信愛の関係です。しかも、イエスには己れがない。己れのほうに引き寄せるということとはしない。自分を与えていらつしやる。イエスの愛というのは、与える愛です。自分は「一粒の麦」です。生命を与えながら、自分是一粒の麦となって死ぬ。現に33歳ほどで亡くなっておられますよね。そういう愛、それを貫いているのが信愛です。

では、男性との関係、男性同志の関係は何なのか。私は信義だと思ふ。男性との間は信義、女性との関係では信愛。どうですか、これは？ 言うことありませんか？ どちらも共通しているのは「信」でありますが、こつち(男女)は愛、こつち(男同志)は義。いやもちろん、信義の底には愛が流れているんですよ、本当の意味の深い愛が流れているけれども。そんな「愛だよ」なんて、ベタベタ言わないものね、男性同志で。でも、そこに深い



思いやりとかというものが表われている。これが「信」という姿で表われているんだろうと私は思っているけれども、そのどちらにせよ、大事なものは「己れがない」ということです。無私、これです。共通なのは無私、私心が無いということです。私心がない姿でどうしておられるか。これは十字架を見ていなければだめなんです。

「己れを愛する者はこれを失い、わがため福音のために己れを憎む者は永遠の生命を得る」

という。ここでも、

「一粒の麦となつて死ななければ、ただ一粒である。ところが、死なば多くの果をむすべり」

というのは、「無私の姿に徹するならば」ということ。「死なば」というのは、

「無私の姿に徹するならば多くの実を結ぶ」

という。ところが、己れというものを愛するようになったら、自己執着というものが出てきたら、それはもう実を結ばない。

「なんだ、結局は自己愛だったのか。あの先生は私のことを愛してくれていると思つたけれども、結局は自己愛なんですな」

というふうに、裏切られたと思うようなことがあるかも知れません。やはり、この無私という、これがどんなに大事かということです。それをここで言ってくださっている。

「²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、

無私の姿に徹すれば、

多くの果を結ぶべし。²⁵己が生命を愛する者は、

己が生命に自己執着する者は、

これを失い、この世にてその生命を憎む者は、

自分を十字架に付けて、旧き^{ふる}我は常に十字架で死んでいるという姿に徹していく。それが「その生命を憎む者」です。

之を保ちて永遠の生命に至るべし。」

そして、「そういう人たちとは、私は常に一緒にいるよ」ということが次に約束されているわけです。こういう姿、無私の姿でイエスに従っていく。そうすると、イエスという方はいつも一緒にいてくださる。イエスご自身の告白として今まで見てきましたように、

「私は父の御意にかなうように生きているので、父は私を捨て給わない。絶対
に父は私を捨て給うことがない」

ということが8章なんかに出てきている。

「²⁹我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うに
よりて、我を独りおき給わず」（ヨハネ8・29）



と仰っています。でも、以下にもありますように、そう仰っていますけれども、

『²⁷今わが心さわぐ、われ何を言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。²⁸父よ、御名の栄光をあらわし給え』

こういうところは非常に人間らしい、人間性の豊かなイエスだと思う。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」(マタイ27・46)

というのも、私は同じだと思うんですよ。理屈では、頭の中では、

「私は自ら命を捨てる。父の御意だから、自ら命を捨てる。それによって人々が救われるんだから、私は命を捨てる。一粒の麦になるんだ」

と、自覚はなさっている。けれども、十字架に本当に神さまに捨てられたわけですよ。

「お父ちゃん、捨てたんか! ねえ、そんなんでいいの!」

という、これは本当に愛の叫びではないでしょうか。使命的存在としては、己れを捨てるということは分かっている。でも、愛の絆きずなというものが今、破られている。捨てられて蹴飛ばされているんです。

「そんなのいいの!? そんなのないでしょ!」

と、私ならそう叫びますね、やつぱり。ここで「心さわぐ」とか、ゲッセマネでのあの祈りとか、「なんぞ我を捨て給いし」とか、そういう言葉をとらえて世の人は、

「イエスは情けないやつだ、あんなに強がり言っているけど、最後になつたら死を

怖がっているじゃないか」

とか、そういう傍観者のようなことで言うなら全然当たらない。自分がイエスの身になつてみる、本当にイエスに成りきつて福音書を読んでごらん。横から、斜めから評論家として読む人は全部、失格です。自分が本当にイエスになりきる、その思いで福音書を読む。あるいは、自分がラザロになり、マルタになり、マリアになつてそれを受けとる。そういう人格的な愛の絆で、信愛の絆で結ばれたなかでこの福音書を読んでいけば、その人にとって生命になる。それを傍観者のに

「そんなことがあるだろうか?」

と読んでいたら、これは全然だめです。そう私は思っています。イエスも泣いておられると思います。

ここに天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、^{また}復さらに^{あらわ}顕さん』²⁹ 傍らかたわに立てる群衆これを聞きて『雷霆いかずち鳴れり』³⁰ と言い、ある人々は『御使みつかい

が為に語れるなり』³¹ と言う。³⁰ イエス答えて言い給う『この声の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。』³¹ 今この世の審判さばは来れり、今この世の君は逐

い出さるべし。³² 我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許もとに引きよせん』

十字架にかけられて天に昇つたら、すべての人を私は自分のもとの引き寄せるからと仰つた。



³³かく言いて、己が如何なる死にて死ぬるかを示し給えり。」(ヨハネ12・24・32)

●天命を知る

口語のほうでもう一度読んでみますと、

「²⁷今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。²⁸父よ、御名の栄光を現してください。すると、天から声が聞こえた。『わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。』²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。』³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。³⁴すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。』³⁵イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわからない。³⁶光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

イエスはこれらのことを話してから、立ち去って彼らから身を隠された。³⁷このように多くのしるしを彼らの目の前で行われたが、彼らはイエスを信じなかった。³⁸預言者イザヤの言葉が実現するためであった。彼はこう言っている。「主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。主の御腕は、だれに示されましたか。」³⁹彼らが信じるのができなかった理由を、イザヤはまた次のように言っている。⁴⁰「神は彼らの目を見えなくし、その心をかたくなにされた。こうして、彼らは目で見ることなく、心で悟らず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。」

⁴¹イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである。⁴²とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかって公に言い表さなかった。⁴³彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである。



この「神からの誉れ」「人間からの誉れ」ということ。パリサイ人の中にも、イエスを信じたい人間はいた。また、イエスを信じた者もいた。けれども、それを公には言い表さない。言い表したら追放されるから、迫害を恐れた。神からの誉れよりも人からの誉れを愛した。この世の現実はみなそうですね。神からの誉れよりも人からの誉れを大事にする。有権者が恐い。だから、本当のことは言わない。そうでしょ。本当のことを言えない。マニフェストだ何だと言いつても、都合の悪いことはみな伏せてある。というのがこの世なんです。私は裁くつもりで言つてませんよ。人間の世界というのはそういうもんだということ。でも、神さまの世界は違う。

⁴⁴ イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。⁴⁵ わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。⁴⁶ わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に來た。⁴⁷ わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために來たからである。⁴⁸ わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。⁴⁹ なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。⁵⁰ 父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」(ヨハネ12・27～50)

ここの50節に、

「父の命令は永遠の命である」

とある。天命を受けとりますと、それは永遠の生命に通じるということですよ。

私はさきほどから「天命」ということを言いました。我々の人生は、天命を知るための人生のような気がします。しかし、子供のうちからは、そんなことはあまり言つてはいけません。子供に、

「あなたは自分の良さに気づいて、良さを伸ばしなさい。そのために努力しなさい。

一生懸命にやりなさい。がんばれば何でもできるのよ」

と励ましてやらないといけません。そうやって努力して、そしてだんだん大人に近づいてきますと、

「天命を知るんですよ」

と言う。そうやって、ものには順序があるんです。小さな子供からそんな、

「神さまの言うことを聞きなさい」

「神さまってなに?」



「信じなさい!」

なんて言つて、ギユウギユウやりましたら、子供は萎縮します。子供はのびのび育てやる。そして、物心ついて、本当に

「人間とは何か? 自分は何のために生きているのか?」

というようなことを悩みだしたときに、

「実はね、お母さんは若い時にこうだったんだよ、お父さんはこうだったんだよ」

と、自分の物語を話してあげる。

「押し付けるのではないよ、参考にしなさい。それから、いい先生を探しなさい。

本当に心から尊敬できる先生に出会いなさい。大学は学問する所でもあるけれども、いい先生に出会ふんだよ」

と、そうやって励ましてやるのが、私は教育ではないかと思っている。「勉強ができる、できない」なんてのは相対的なことです。

「人生、何のために生まれてきたの? 何を目当てにして生きていくの? 本当の希望というのはどこにあるの?」

と、そういうことを必ず感じる時があるはずです。そのときに的確なアドバイスを。しかも、押しつけではない。

「一緒にそれを探していこう。一緒に目標に向かって進もう。援助を惜しまないよ、精神的な援助を。時には経済的な援助もふくめて、あなたの志しづめが成るように、どんなことでもするよ」

という、そういう形でバックアップしていくのが本当の親子の関係ではないだろうかというふうに私は思うんです。こういう福音書を読んでいますと、そんなことまでだんだん思う。やはり、イエスというこんな素晴らしい方が、なんでこんなに憎まれ迫害され、最後には命まで狙ねらわれなければならないのだろうか。そんなことを思わざるをえない。

それから、先程申しましたように、ヨハネ伝の主題は「永遠の生命」です。イエスは「終りの日に人々を甦よみがえらせる」

と、何度も言っておられます。その永遠の生命のことは、5章を開いてください。これは38年間、病で悩んでいる人を立たせられた、その場面です。

「⁸イエス言い給う『起きよ、床とこを取りあげて歩め』。この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。」(ヨハネ5・8～9)

と。ところが、それは安息日だった。それでいったい「床を取り上げて歩めと言ったのは誰だ」と。その人も知らなかったけれども、イエスの方があとからその人を見つけて、

「あなたは癒された。もう再び罪を犯すな。もつと悪いことが起こったらいけないから」

と言われた。それを聞いて、この人はユダヤ人の所へ告げ口しに行つた。それでイエスは



迫害を受けるわけです。

¹⁷ イエス答へ給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』

と。安息日を破った。神さまのことを「わが父」と言つて、自分を神と等格にした。それで彼らは迫害しようとした。それに対しての答えが19節からです。

¹⁹ イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行かうほかは、自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。²⁰ 父は子を愛して、その為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給はん、汝等をして怪しましめん為なり。

その次ですね。

²¹ 父の死にし者を起して活し給うごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。

ここではつきりと言つておられます。正にラザロの甦ったのはこれを実証されたわけですよ、「子もまた己が欲する者を活すなり」と。それから、

²⁴ 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。

「審判のために来たのではない。私は救うために来た。私の言葉を聞いて、この父なるお方を信する者はもう永遠の生命だ。しかも審判には至らない。もう既に死から生命に移っているんだよ」

と言つておられる。

²⁵ 誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。

と。死んでいる人間も、墓に葬られている人間も、神の子の声を聞いたら甦るということをここで約束しておられる。

「死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり」

と。これは、「既に墓の中に眠っている人」ともとれるし、まるで今、自分に生命がなくて死人同様の生きがいのない人、喜びのない生き方をしている、「生ける屍しかばねのような人」と、両方にとっていいと思う。とにかく、私というこの生命から発する声を聞いた者は生きるんだという。

今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。²⁶ これ父みずから生命を有ち給う

ごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、²⁷ また人の子たるに因りて、審判する権を与え給いしなり。²⁸ 汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。²⁹ 善をなしし者は生命に甦いのちよみがえり、悪を行ひし

者は審判に甦いのちよみがえるべし。」

どっちも甦るのだけれども、善を行った人は生命へと甦つていく。悪を行った者は審判へと甦つていく。さっきの、



「私は誰も審かない。しかし、私の語った言葉が、その人その人の姿に応じて、言葉が審くであろう」

と言っておられる。やはり、この「審判がある」というのは非常に救いです。この世の中はめちやくちやですよ。どんなことをしても、それでそのまま終わってしまう。こんな不条理なことはありません。そうじゃなくて、必ず神さまは義^{ただ}しい審判があると。審判はまた救いへの道なんです。本当に審判によって服すならば、それは生命へ至る。けれども、どこまでも齒向かっていたら、「第二の死」というものがあつて、それはもうゲヘナの池に投げ込まれる。黙示録に言われていますように。

だから、どんな過去がマイナスであつても、あの十字架の上の一人の盗賊のように、死の瞬間に悔い改めたら、そこで救いにあずかる。ところが、己れを主張して、言い張つて、拒絶し続けたら、これはもうどうしようもない。

そして、いろんな不慮の災害によつて、自然災害であろうと、また通り魔事件であろうと、本当にこんな人がなぜこんな犠牲に合わねばならないのか、ということがいつぱい起こっています。正に今、天変地異がすごいです。スマトラ、サモア、その他、「あんなのが起こつていて、本当に神さまはいるの?」と人は言うかもしれない。けれども、福音書を読んでいますと、

「終りの時にはこんなことがある。地震がある、飢饉がある」

と、非常な天変地異のことが予告されている。でも、

「最後まで堪え忍ぶ者は救われるべし」

と言われている。そうなつてきますと、やはり、私たちは地上の人間としては、この命をどこまでも救いたい。苦しんでいる人があつたら助けたい。瓦礫^{がれき}の中に埋もれている人は助け出したい。これは自然な情です。と同時に、私たちはどんなことに出つくわすかわからない。何が起こるかかわからない。となりますと、この命を神さまにすっかり委ねきつて生きる。これが最も確かな道なんです。

「生きるにも死ぬるにも、主と共にあるならば、それはもう永遠の生命である」

と。キリストに抱^{いだ}かれてある生命^{いのち}、これは永遠の世界に生きている世界です。相対的な生とか、相対的な死とか、それを乗り越えた本当の生命、これが永遠の生命なんです。これがもう既にこの世に生きているときに、我々にいただいています。我々は相対的な命の中に絶対次元の生命をいただいています。これは死を突破して、向こうでも輝く。既に向こうへ行っている人はそこで永遠の生命をいただいています。イエスは永遠の生命の主体として、この世においてもあの世においても主なんです。二つの世界をしっかりと掌握しておられる。そういうお方なんです。だから、

「この病は死に至るものではない」

と、ラザロに対しても言われた。



「あなたの兄弟は甦る。私は復活よみがえりであり、生命いのちである。およそ生きて私を信ずる者は永遠に死なない」

と。ごく自然にイエスの口からそれが流れて出てくる。それはそういう永遠の生命の主体だからなんです。相対界と絶対界の両方にしっかりと軸足を置いておられて、両方とも支配しておられる。そういうお方です。しかも、

「私は自分から来たのではない。父なる神が私をこの世に送り給うた。送り給うたそのお方を信じるなら、送られてきたこの子を敬うのは当然ではないか。しかし、あなた方は子を敬わない。子を敬う者は父をも敬うし、父を敬う者は子をも敬う」

と。ずうつとそのあと出てくる。そのように見てきますと、このヨハネ伝は既に5章で復活の生命のことを宣言しておられる。6章でも今度は永遠の「生命のパン」のことが出てきて、

「私を食べる者は死なない。終りの時には甦る」

と。あそこでは「終りの時、終りの時」とありますけれども、この10章にきますと、

「もう終りの時ではない、今だ」

という。11章でも。そういうように、ずうつと「永遠の生命」というものが、第1章から最後まで貫いている。そして、ヨハネ福音書の最後に、

「このイエスのなさったこと、語られたことをもつともつと書きたいことは山ほどある。全部書いたら、図書館に入りきれないぐらいになる」

というふうに言いながら、

「しかし、これを書いた目的は、イエスというお方を信じて、あなた方が永遠の生命を得るためである。その一点である」

ということを言っている。ですから、このヨハネ福音書を読むならば、他の福音書も素晴らしいけれども、ヨハネ福音書を通して最も訴えているもの、与えたいと思っているものは、このイエスの愛の「永遠の生命」です。そして信愛であり、信義であり、しかも根底に流れているものは無私である。

だから、ラザロを甦らされたお方が自らが「一粒の麦」となって地に死んでいるというドラマなんです。これをどうぞ皆さん、皆さん自身でしっかりと受けとって、

「そうだ、何があってもいい。このイエスというお方と一緒に生きているならば、暗闇も暗闇ではない。闇の中にも光がある。常に光である。我々も光になる」

「光がある間に光を信じなさい」

と言われた。この集会をやっていますと、ここに光としてイエスという方が来てくださっているんだと、私はそう受けとりたい。「主よ、主イエス・キリストよ」と心に念ずるなら、



そこにイエスは来てくださる。そういうお方ですから、これは信ずる他ないんです。でも、信じて損はしません。本当に信じなければ損ですよ、損得でいうならば。皆さんお一人お一人がイエスを生きてくださって、

「私の中にイエスが生きておられる。だから、私は死なない。私はいつも輝いてい
るんだ」

ということ、皆さんお一人お一人が存在をもつて証していただきたい。それがイエスの証人、イエスのあとに続く者なんです。

私はやがて向こうへ逝きます。そのあとの願いは、私のあとにも私のように告白してくださる方がたくさん出てくることなんです。私が「一粒の麦」となって地に死ぬ。そうしたら、皆さんが多くの麦の果となって、この世に遺ってください。そして、また皆さんが「一粒の麦」となって、また皆さんの多くの果を結んでいく。そうやって、後代に伝えられていく。これが「道」というものだと思う。道というものはそういうものです、後継者が必要なんです。NHKテレビの「歴史秘話ヒストリア」という番組で、嘉納治五郎のお話が出ていた。私は見ていたら、感動しました。……(省略)……

「道」というのはたった一人から始まって、ずうっと全世界に広まっていく。イエスという「一粒の麦」が今、全世界に広まっている。それは伝えていく人がいるからです。また、伝えている人の中にイエスという方が乗り移っているから、伝わっていくんです。

私はその一人にされました。法律学をやり、この世のことをやりながら、まるで伝道者みたいなことをやっている。これは無茶苦茶な話ですよ、本当に。でも、そうやってしました。「天命を知る」ということ。「私の天命は何か」ということを常に思いながら、自分の持てるものをすべて注ぎだして、イエスの御意に従っていこうと。「主よ、助け給え」と、これしかないんです。そういう心を今度は皆さんが、一人一人が受け継いでくださって、私が向こうへ逝ったあとも――

「まだ簡単には逝かないようにしてください、まだ逝きたくはありません」

とお祈りやお願いはしているけれども――でも、私が向こうへ逝ったあとは、皆さんがその志を継いで、道としてのイエスの愛、信義、信愛を伝えていく。

「宗教」ではありません、絶対に「宗教」ではありません。イエスという方は、「宗教」という凝り固まったような枠から解き放って、本当の生命を現わしてください。本当の人の道を現わしてください。神さまに己れを献げるといふ本当の生き方をイエスは示された。決して「キリスト教」だとか、宗教体系を確立するなんてなさっていない。それは人間ですから、集まれば、集まりも必要でしょう、リーダーも必要でしょう。けれども、「組織」ではない。本当の生命、「一粒の麦」の生命、この生命は脈々と伝えられていくんだと。そのことをヨハネ福音書は告白していると私は思う。

「あの山でもこの山でもない。霊と真をもつて拝する者を父は欲しておられる。」



そういう礼拝者を求めておられる。今、その時がきている」

と、サマリアの女との会話で言っておられます。そういう意味では、我々日本人にとって——日本民族はいろいろな伝統を持っています——ヨハネ福音書は一番、慕わしい。ある枠組みを押しつけようとしなからず。生命そのものを伝えようとしてくれている。そして、

「私と一緒に生きよう。永遠の生命だよ」

と言ってくださいているからです。

そういうことで、私はヨハネ伝がますます大好きになっている。皆さんも、そのように受けとっていただければ、幸いと思っています。それではこれをもって今日のお話の終りいたします。

● 祈り

では、最後に一言お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、この会場に一人一人をそれぞれの所から呼び集めてくださって、あなたの生命の御言を語り伝えてくださいます、ありがとうございます。どうぞ、あなたが一人お一人の心の中に住み給うて、

「あなたは既に永遠の生命だ。私はいつもあなたと一緒にいるから。あなたの中にいるからね。世はどんなに闇であつても、私と一緒にあれば、そこは光だよ。私こそ世の光だから」

と、あなたはどのように仰つて、私たちの行く道の足の燈火、光となつてくださることを感謝いたします。どうぞ、私たち一人ひとりが一人の人間として、あなたというお方が示された道を慕い訪ね、そして同じ歩き方をさせてくださいますように。

罪を贖うとか、そういったことは、私たちにはできません。しかし、あなたの心を心として、あなたを信じ、神さまを信じ、そしてあなたが愛してくださったように、「兄弟姉妹互いに相愛する」、これがあなたの求め給うところでございますから、いよいよ、そのようにして身に親しく私たちと一緒に歩いてくださることを希こいねがいたてまつります。

今日ここにいらつしやらない方の中にも、どうぞ、この思いが伝わりますように。病の床にある者たちの中に、どうぞ今、あなたが働いてくださいますように。主イエス・キリストの尊き御名によつてこの祈りを御前にお献げいたします。アーメン。

